The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『景社紀事』簡介および影印
Author(s)	堤, 一昭
Citation	懐徳堂研究. 2023, 14, p. 33-67
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/94540
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『景社紀事』簡介および影印

堤　一昭

本稿は、西村天囚が興した大阪の文会（自作の漢文を持ち寄り、批評する会）「景社」の規約・同人・例会の活動を漢文で記した『景社紀事』の概要を紹介し、その画像を示すものである。この『景社紀事』は同人らの手になる自筆原本であり、記載は明治四十四年（一九一一）から大正五年（一九一六）に及ぶ。この時期に天囚は懐徳堂の復興にむけて尽力していた。当時の大阪・京都の漢学・東洋学の主な人物の交流を知る手がかりとなる貴重な資料である。西村天囚はじめ同人らの他の資料とも対照して、新たな知見を得る手がかりとなれば幸いである[1]。

『景社紀事』は現在、大阪大学総合図書館の石濵文庫に所蔵される。石濵文庫は、大正から昭和四十年代初に活動した東洋学者・石濵純太郎（一八八八～一九六八）の蔵書ほかの研究資料を収める。彼は敦煌学、ニコライ・ネフスキーと共に取り組んだ西夏文字の研究、富永仲基ら近世以来の大阪の学術研究などで知られ、一九五〇年には懐徳堂記念会の事業運営委員を委託されている[2]。なお、石濵は天囚の紹介で景社に大正五年四月二十五日から参加している[3]。

二〇一八年十一月、石濵の没後五十年を記念する国際シンポジウムが関西大学で開催された。筆者はそこでの報告を依頼されたことを機に、同年八月から石濵文庫の未整理資料の調査を行い、彼の東京帝大在学時代の論文、その他の自筆ノート類とともに『景社紀事』を見いだした。報告の後、概要を「石濵文庫所蔵石濵純太郎自筆稿本類の発見—明治末年の「支那文学科」の学修、大正初年の「文会」の資料として—」[4]で速報した。また、「石濵純太郎は、いつ内藤湖南に出会ったのか?—新出資料『景社紀事』の紹介を兼ねて—」[5]では、『景社紀事』の記

述をもとに表1「景社題名に見える同人一覧」、表2「景社会合一覧」を作成、掲載した。その後、関西大学の研究者との「内藤文庫および石濵文庫所蔵資料の調査と整理に関する共同研究」により『景社紀事』を撮影し、ここに画像を公開することを得た[6]。

『景社紀事』の概要は次の通りである。

A．体裁

縦二五cm×横一七・五cm　紙縒綴じの抄本一冊。表紙除き三九葉だが、書き込みがあるのは最初から二九葉まで。葉数表記なし（以下の葉数表記は、筆者が本文の一枚目から数えてつけたもの）。表紙左肩に外題「景社紀事」直書（本文との比較で西村天囚の書と分かる）。本文は青い罫の「景社文稿」原稿用紙に、墨書（一部朱墨、朱印あり）。二九葉裏には、以下の三紙が挟み込まれていた。①「景社文稿」原稿用紙に記された会合記録の書きかけ1枚、②巻紙に記された年次記録の草稿らしきもの（大正七年一月廿五日の少し前から十月にかけての月日が記される）、③昧盦先生あて石濵純太郎書簡。

B．景社同約　（1葉表～2葉表）

冒頭に「景社同約」と題され、末尾には、「明治四十四年辛亥二月社末西村時彦識」の識語がある。行を変えて1葉の最後まで朱墨の同筆で小牧櫻泉の社約についての発言が引用され、2葉表の冒頭からの附記の最後に「大正乙卯一月邨彦又識」とある。

C．景社題名　（3葉表～5葉裏）

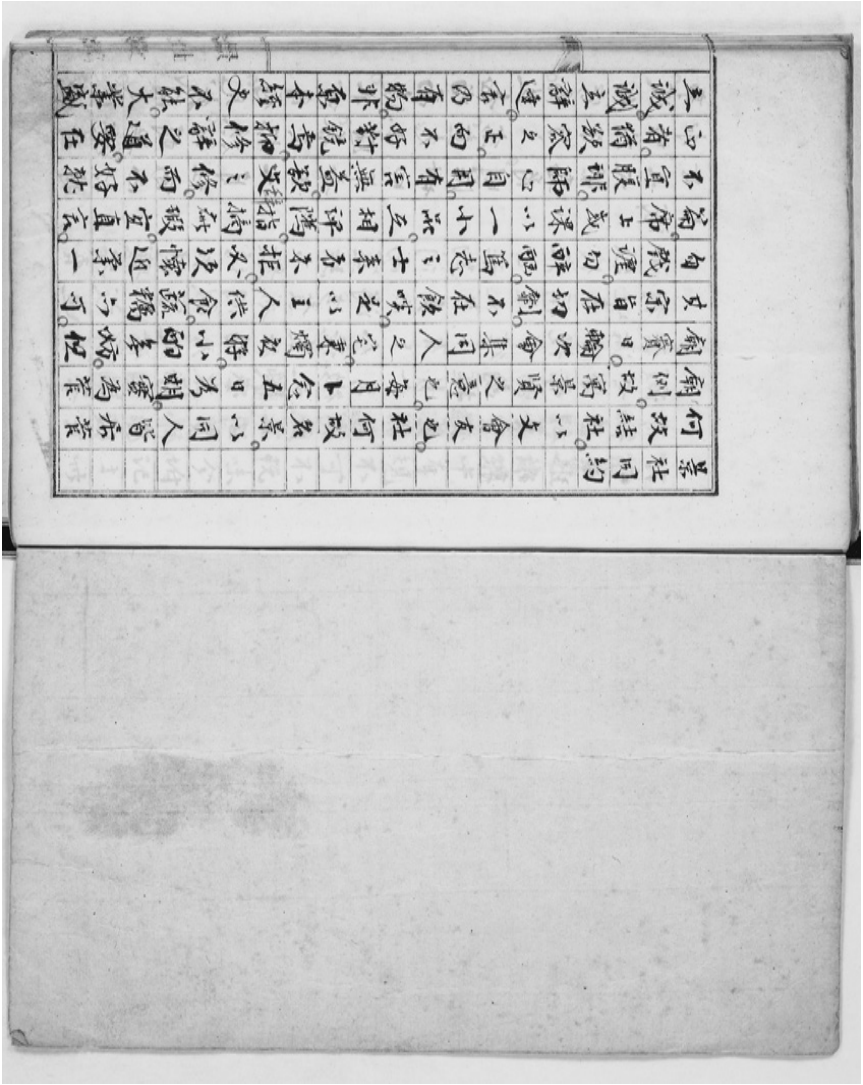
同人名を列挙した「景社題名」には、二七人の氏名や通称、字号、出身地、入社の年月、入社時の年齢、住所が順に記される。なお、29葉裏には、狩野直喜ほか六人と小牧昌業の計七人の氏名と住所が記される。「景社題名」の部分と4人が重複する。29葉に記載の人物も含めると全体で三十人について記されている。

D．景社紀事　（7葉表～28葉表）

「景社紀事」は本冊子の題名であるとともに、毎回の幹事（各回の末尾に「幹事某某記」とある）がまわりもちで担当した会合の記録である。冊子自体も次の幹事へ回されていったと考えられる。記された最後の幹事が籾山逸であるのに、石濵の手元に『景社紀事』が残った理由は未詳である。記された会合は合計二六回。

以下、表紙から記載のある最後の29葉まで、および上述の三紙①②③の画像を示す。

表紙



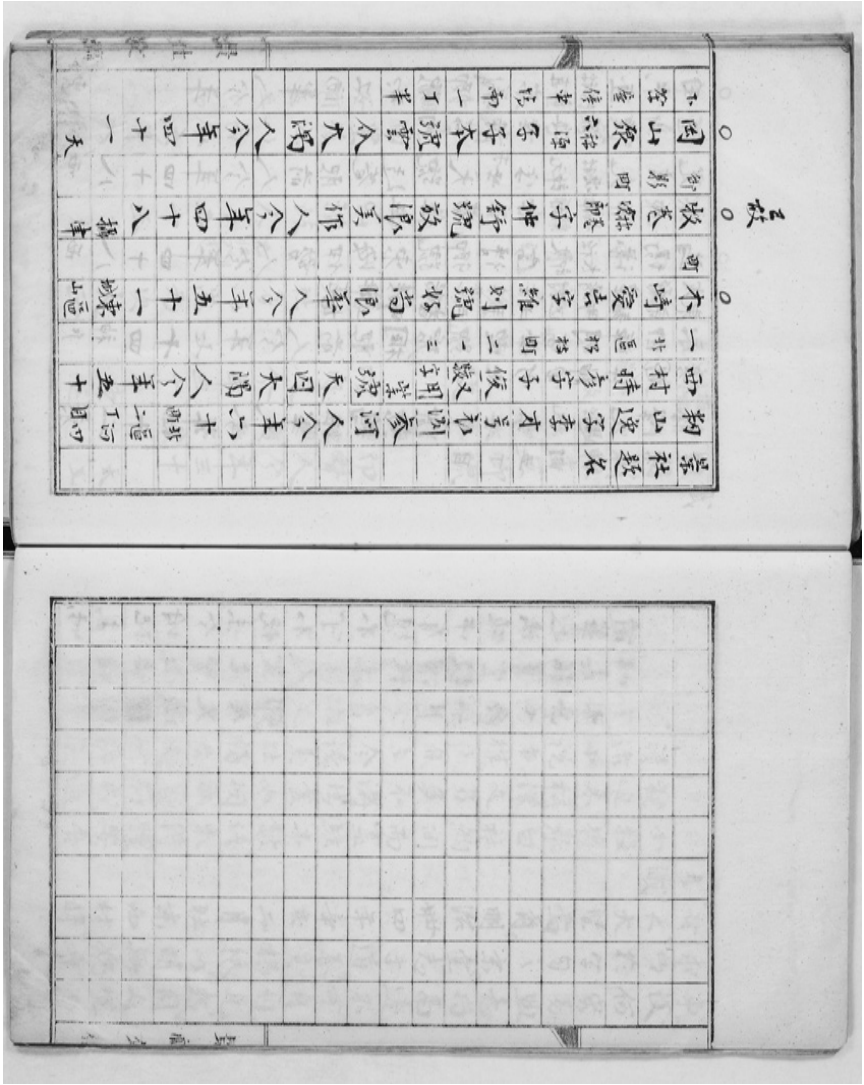
表紙見返し1表

1葉裏〜2葉表

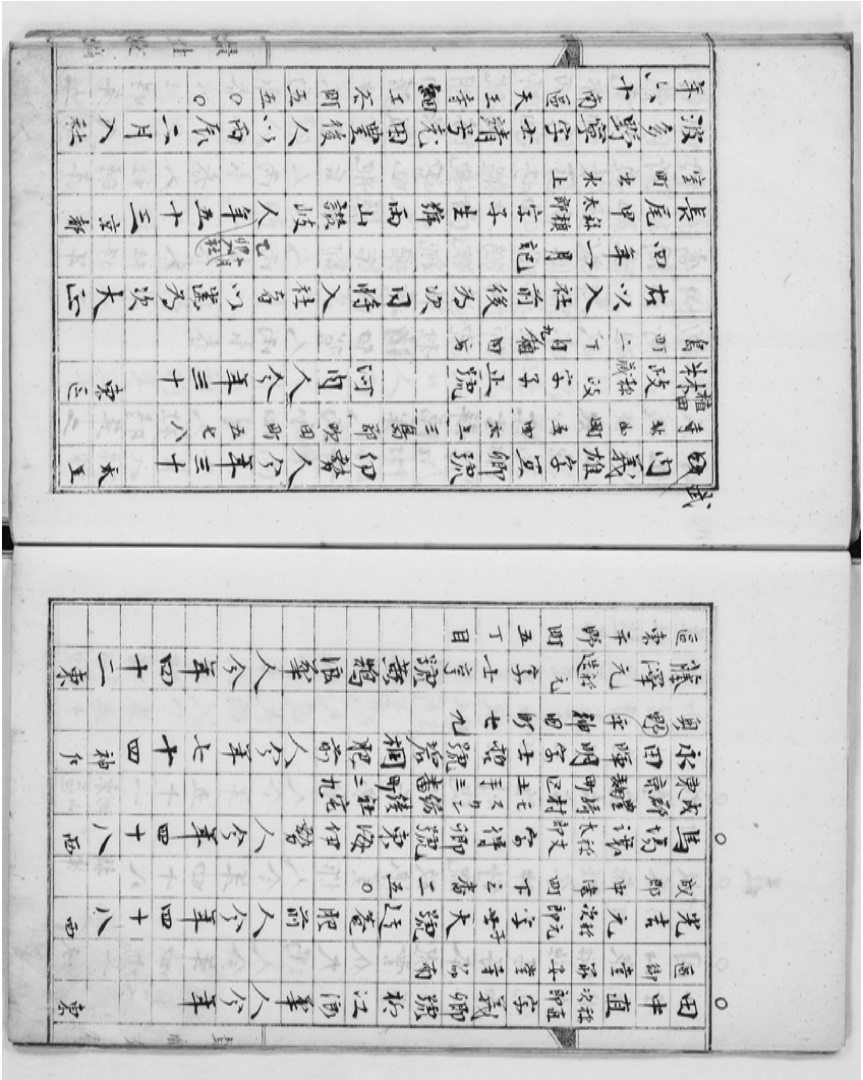
事後何容易歟志尚高遠不可自句凡我同人宜不
求巧於字句之末壹志于道養其根柢以明無媿乎
古之大賢焉明治卅四年辛亥二月社中西村時
彦識

小牧櫻泉曰社約簡而盡結束數語表降體要吾
觀近来稍漢文者多不講体変如仮城家所或迫
詩治小説者往往有之今德業社諸君文修辭之
誠言皆有物焉推古今考徴文獻要其終志継筆
有獅子搏兎之慨蓋其志獨既正用力根柢故能
砥然不勝敬服

前輩之法頗中有規不可不既味今增記于此
以志服膺焉敬謹誌示于人弐七陵名涼誼
大正七年一月　邪彦又識



2表裏～3表裏



3葉裏～4葉表

4葉裏〜5葉表

内藤霞字炳卿號湖南陸中人丙辰春入社時年五十一京都吉田町高倉

狩野直喜字子温號君山肥后人丙辰春入社時年四十九京都田中村字大溝六

富岡謙蔵字君偉號桃華京都人丙辰春入社時年四十京都宮町中立売上

磯野惟秋字秋卿號秋濤伊賀人丙辰春

石濱純太郎字士龍号華人丙辰四月入社時年二十九大阪東成郡墨江村字千體

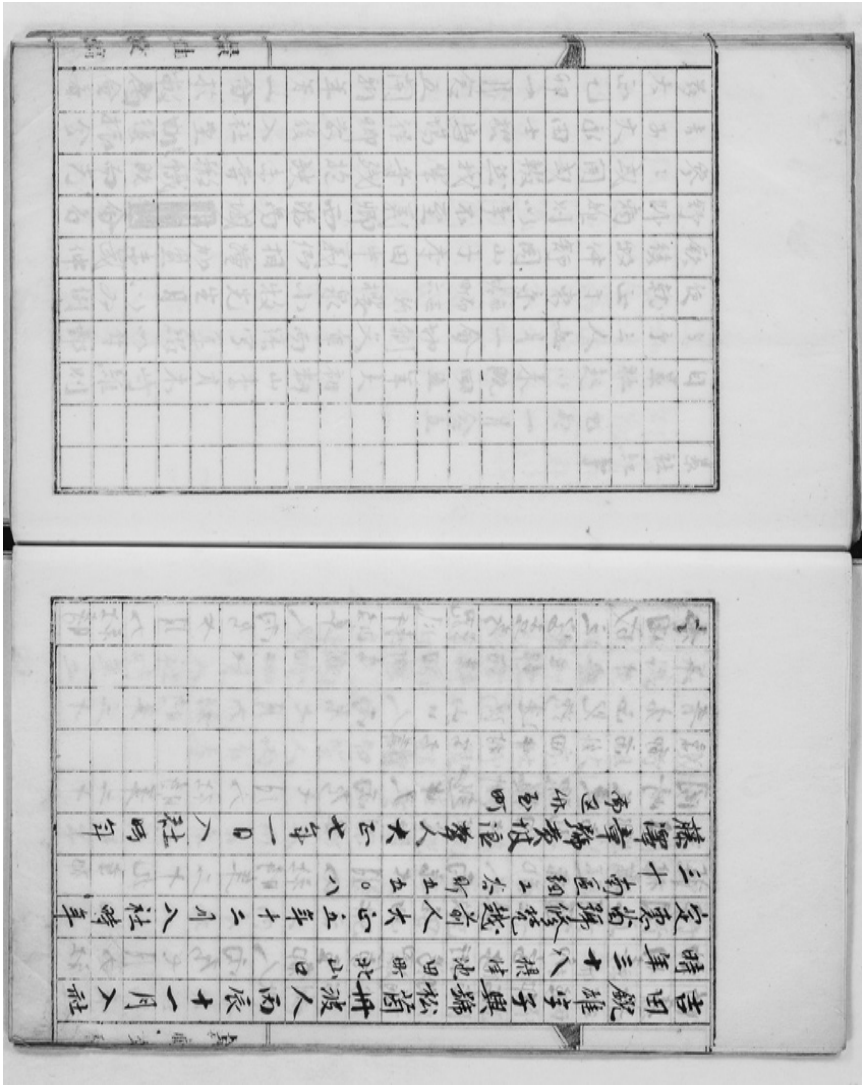
本田成之字喜多號風軒岐阜人丙辰七月入社時年三十五京都市吉田町字関田二七

青木正兒號迷陽山口人丙辰七月入社時年三十京都市外田中村字大溝

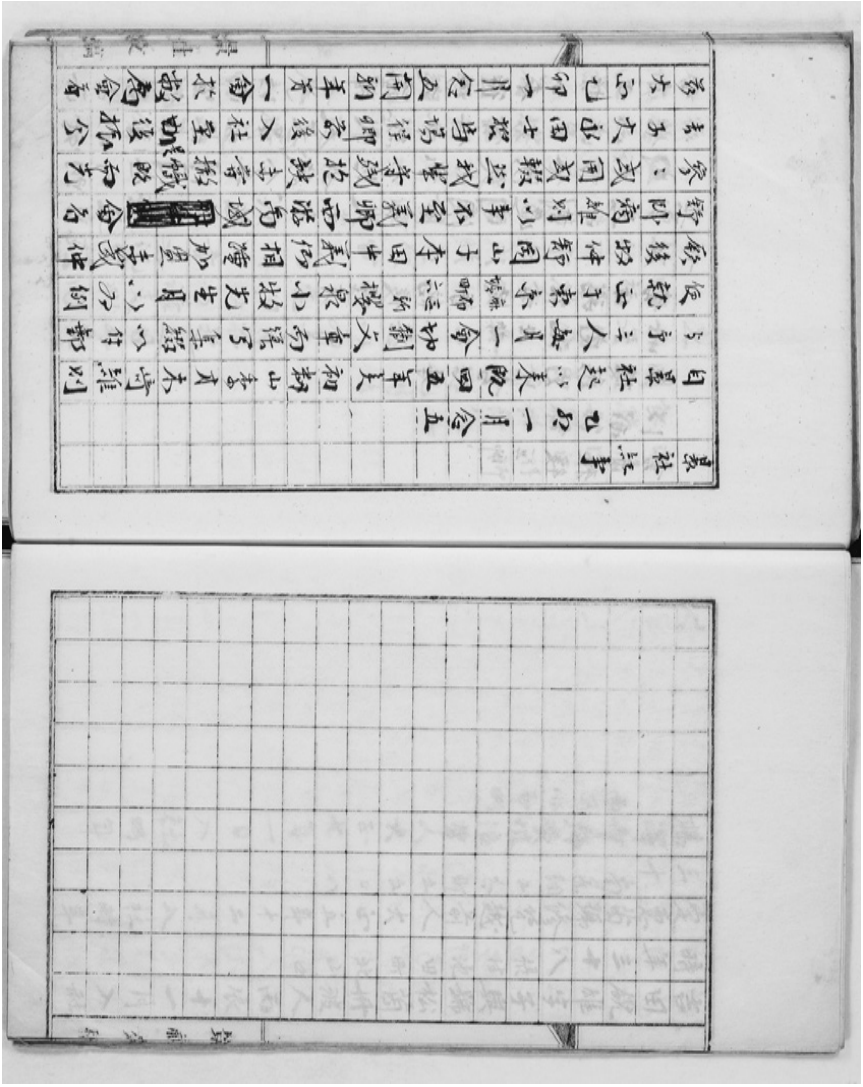
岡崎文夫號櫻洲越中人丙辰七月入社時年二十九京都市外田中村字中川原

藤林喬起京都人丙辰七月入社時年二十九京都市間之町通上珠数屋町上

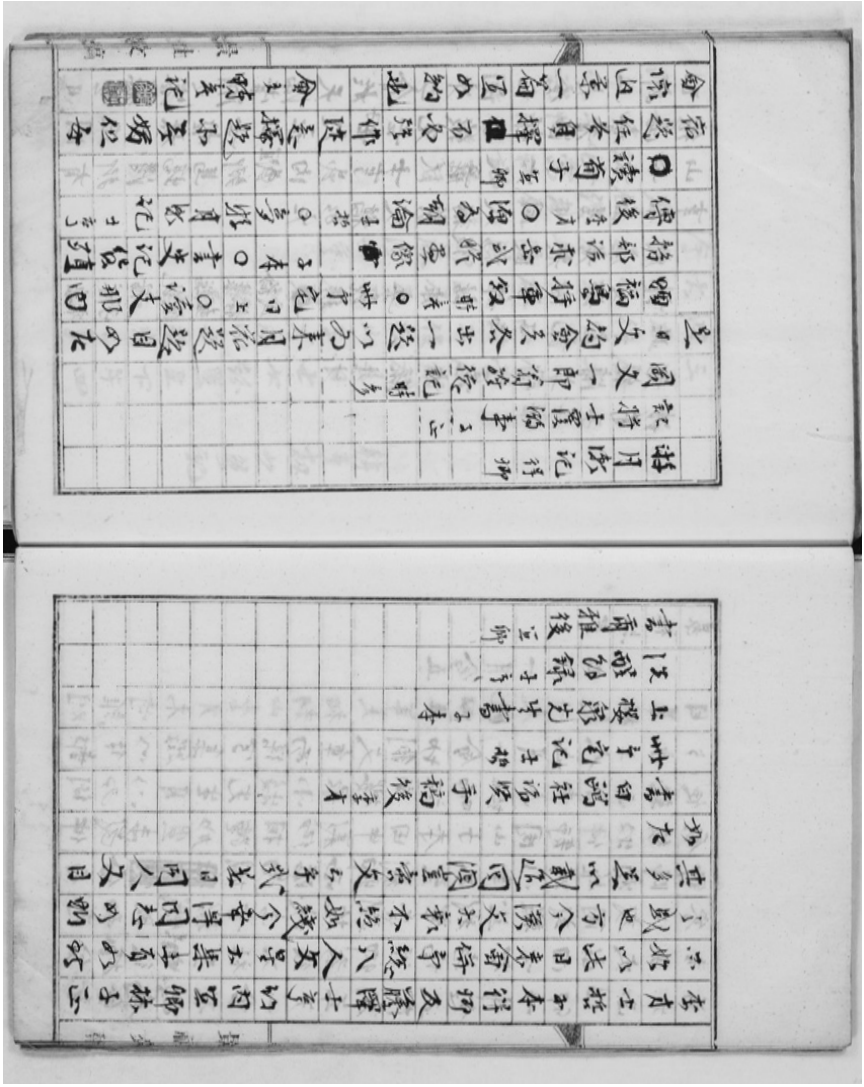
神田喜一郎字行号鬯盦京都人丙辰七月入社時年二十京都市富小路通今出川北



5 裏～6 表



6裏～7表



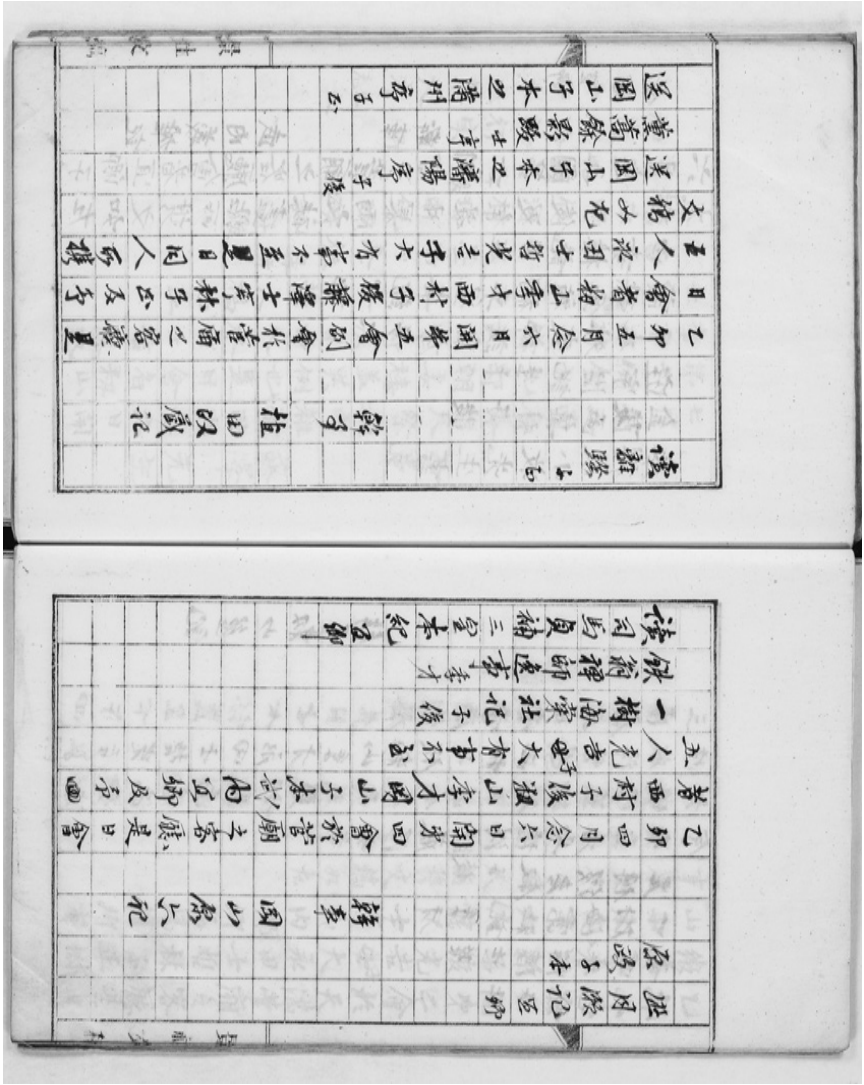
7葉裏～8葉表

8葉裏～9葉表

乙卯二月念三日于天満菅廟之客館是日
後為會者西邦子俊光吉子大永田士哲林子正因
山子本及予六人藤沢士亨武内士頌卿馬場潤卿有
事不至是日同人所携文稿如左
殷虛考叙跋子俊
、讀支那内務部話來兵義纂　論春秋統　諸求兵
武義血像　子春
此予宅記子正
為衣浦草堂毛花本跋　李才
讀荀子　士哲

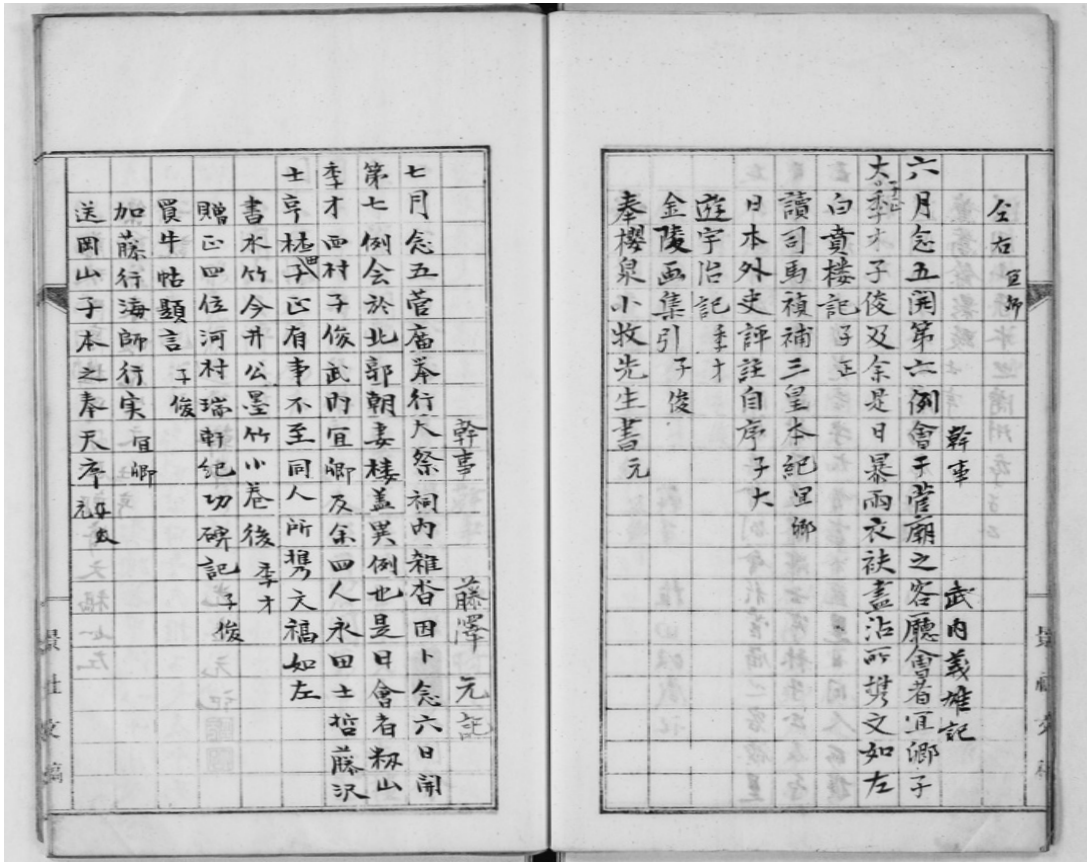
稿子叔少愛記

三月念五日當菅廟例祭是日士如鈴鹿至下午四
時乃待只畢西村子俊翔山李才永田士哲黄吉子
大行内亘卿林子正及予之人與相聚為是為卯三
今本至方山陽潤卿藤澤士亨
左傳從考叙子俊
一拙海業社記李才
書賞牛帳後士哲
此予宅記子正



9 巻頭〜10 巻末

10葉裏～11葉表



仝右 宜卿

幹事　武内義雄記

六月念五開第六例會于菅廟之客廳會者宜卿子
大季才子俊及余是日暴雨衣袂盡沾所携文如左

白賁楼記 子正

讀司馬禎補三皇本紀 宜卿

日本外史評註自序 子大

遊宇治記 季才

金陵画集引 子俊

奉櫻泉小牧先生書 元

幹事　藤澤元記

七月念五菅廟奉行大祭祠内雜沓因卜念六日開
第七例会於北郭朝妻楼蓋異例也是日會者籾山
季才西村子俊武内宜卿及余四人永田士哲藤沢
士亨楢田子正有事不至同人所携文福如左

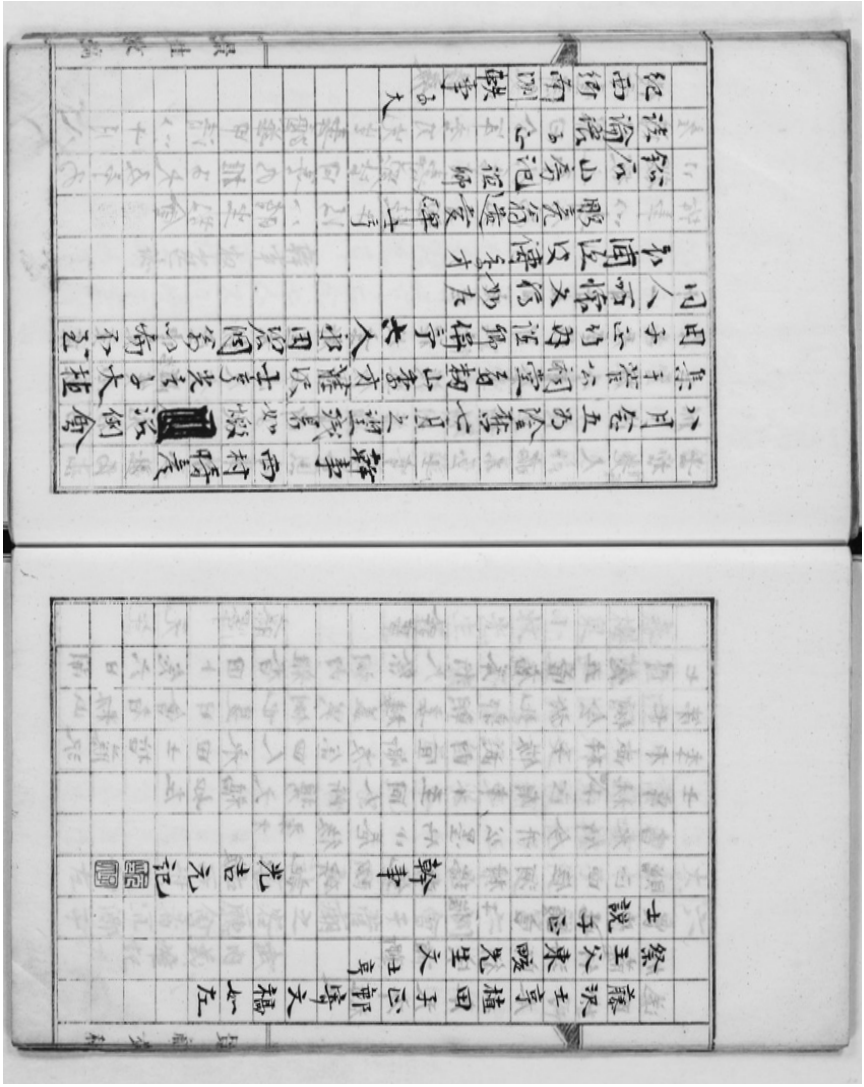
書水竹今井公墨竹小巻後 季才

贈正四位河村瑞軒紀功碑記 子俊

買牛帖題言 子俊

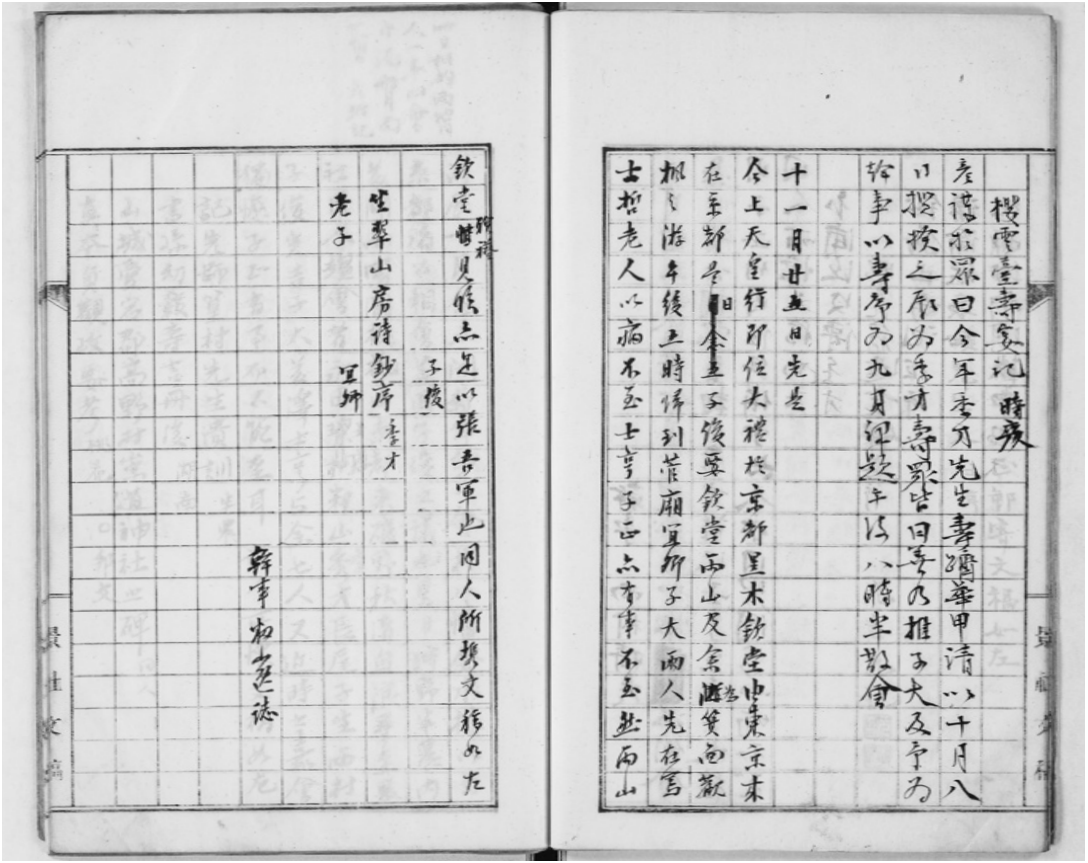
加藤行海師行実 宜卿

送岡山子本之奉天序 元



11葉裏〜12葉表

12葉裏〜13葉表



櫻雲堂壽家記　時疫

產婦於衆曰今年季月先生壽齡華甲清以十月八日授授之厚為季方壽衆皆曰吾乃推為大及事為於事以壽命為九月印數年以八時半數會

十一月廿五日先生

令上天皇行即位大禮於京都是木欽堂中來京木在京都是日令五子後要欽堂兩山及余遞賀面歡相飲酒午後五時伴到菩廟冥所子大兩人先在寫士哲老人以病不至士哲子西六有事不至然兩山

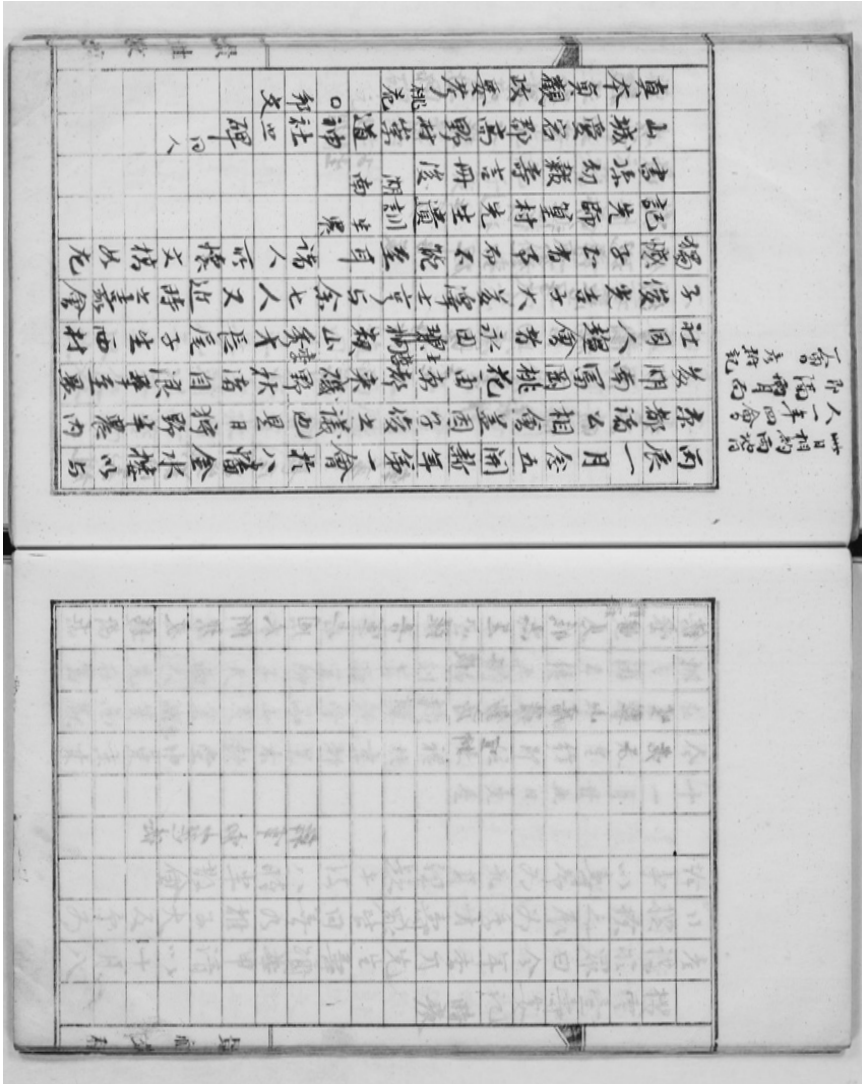
欽堂時見後六是以張喜軍山同人所撰文移如左

子後

生翠山房詩鈔序　壹才

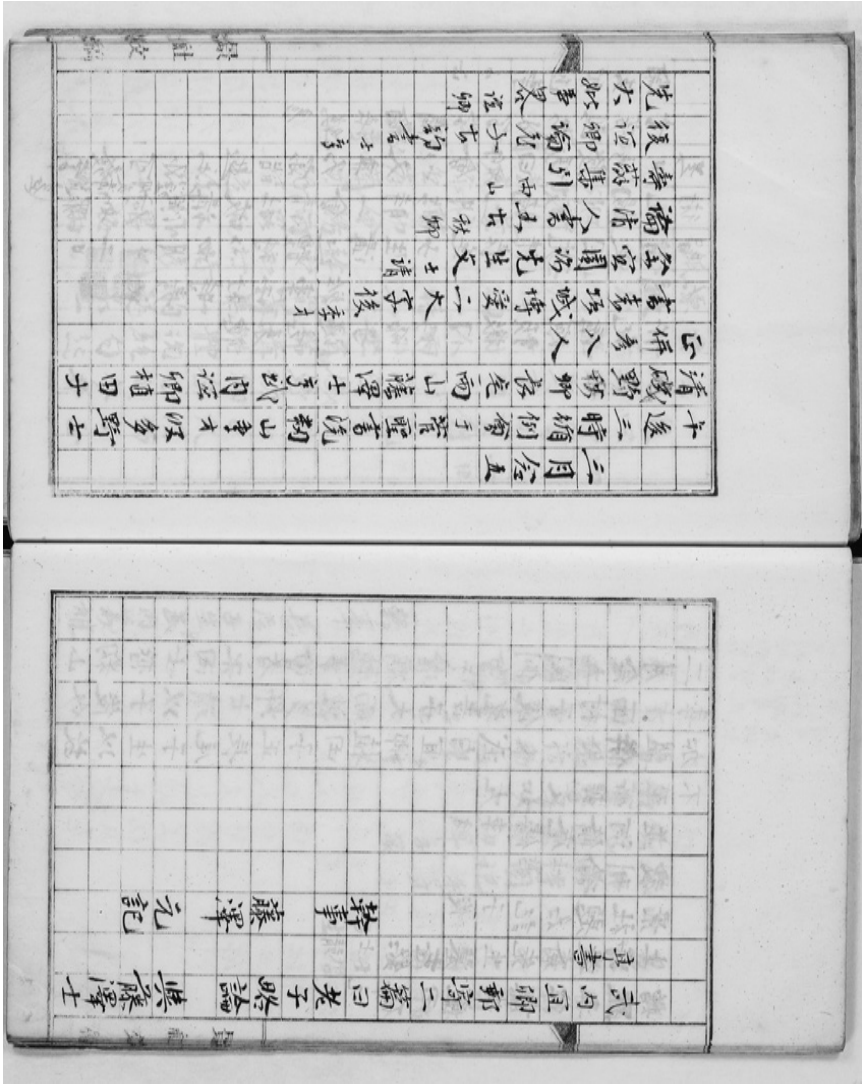
老子　冥所

辭事　和山老徳



13葉〜14葉

14葉裏～15葉表



15葉裏〜16葉表

16葉裏～17葉表

論支那近事了正
書芳烈公子写学胄論語後彦
是日彦發議曰斯會以文章為宗旨然亦不可廢学
術也渴月或渴二月臨時一會請社友講演何如衆
皆賛之因先請長毛子生講近體詩以四月十二日
為期
幹事西村時彦

沂記講演須撤门好酒子随意来聽

四月十二日
午後四時會于菅廟書院季才兩山子大渲卿子正
及彦并上野有竹小川簡然俊野秋卿余百之今井
其一等總三十餘人兩山然講席講詩體說絶句起
原及絶句声律約一時三十分間講畢一酌題名一
紙以為記念
幹事西村時彦

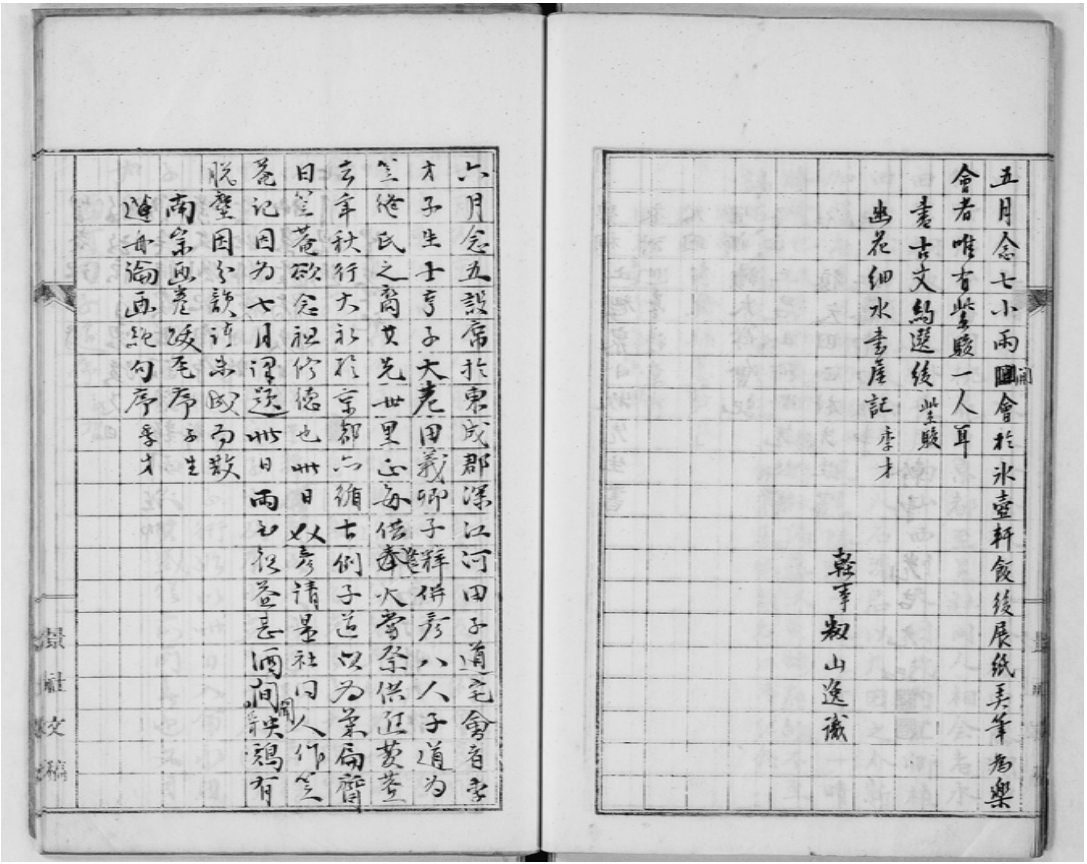
是日博文堂主幇助會務兩罷百之作墨梅雨
山添竹素才添魚岑蘭其餘皆題詩名一二絶
以献菅廟亦一時勝事也

17葉裏～18葉表

四月念五開第二次大会於故方占春楼内藤湖南
狩野君山富岡桃花自京都至景社同人相会者永
田碧桐籾山衣洲長尾雨山西村天囚武内宜卿植
田子正石濵純及余十一人石濵君以天囚之介新
加盟者是日微雨澱江風景殊添一段之奇実一時
勝會也波多野老田磯野秋渚藤沢黄鵠有故不至
諸君所懐文記于左　飲畢展紙題名以為記念
湖南
君山
桃花　幸野梅嶺碑

碧桐　上櫻泉小牧先生書
衣洲　巡臺詩草序
天囚　壽蘇雅集詩序
宜卿　讀大学會記
子正　上君山狩野先生書
純　復天囚西村先生書
元　江藤南白佚事
幹事　光吉元記

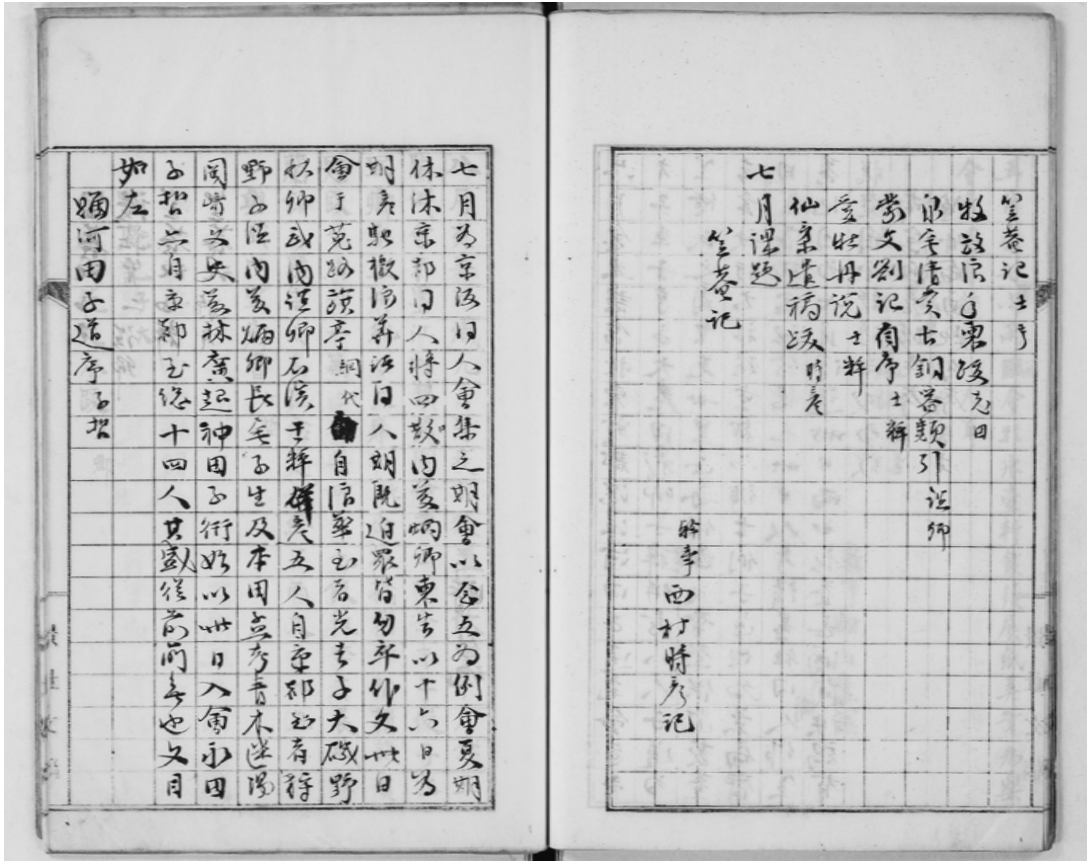
18葉裏～19葉表

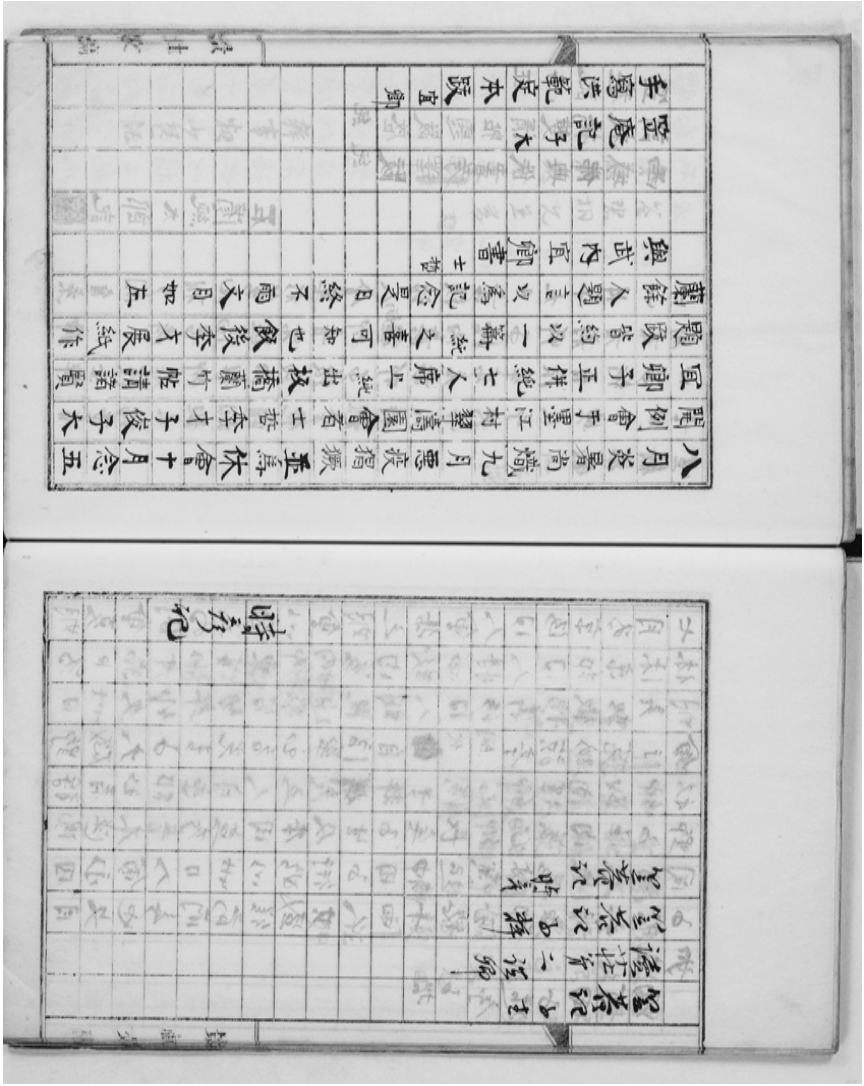


五月念七小雨闌會於氷壺軒飯後展紙弄筆為樂
會者唯有紫駿一人耳
書古文鳥選後 紫駿
幽花細水書屋記 李才
韓事叔山逸識

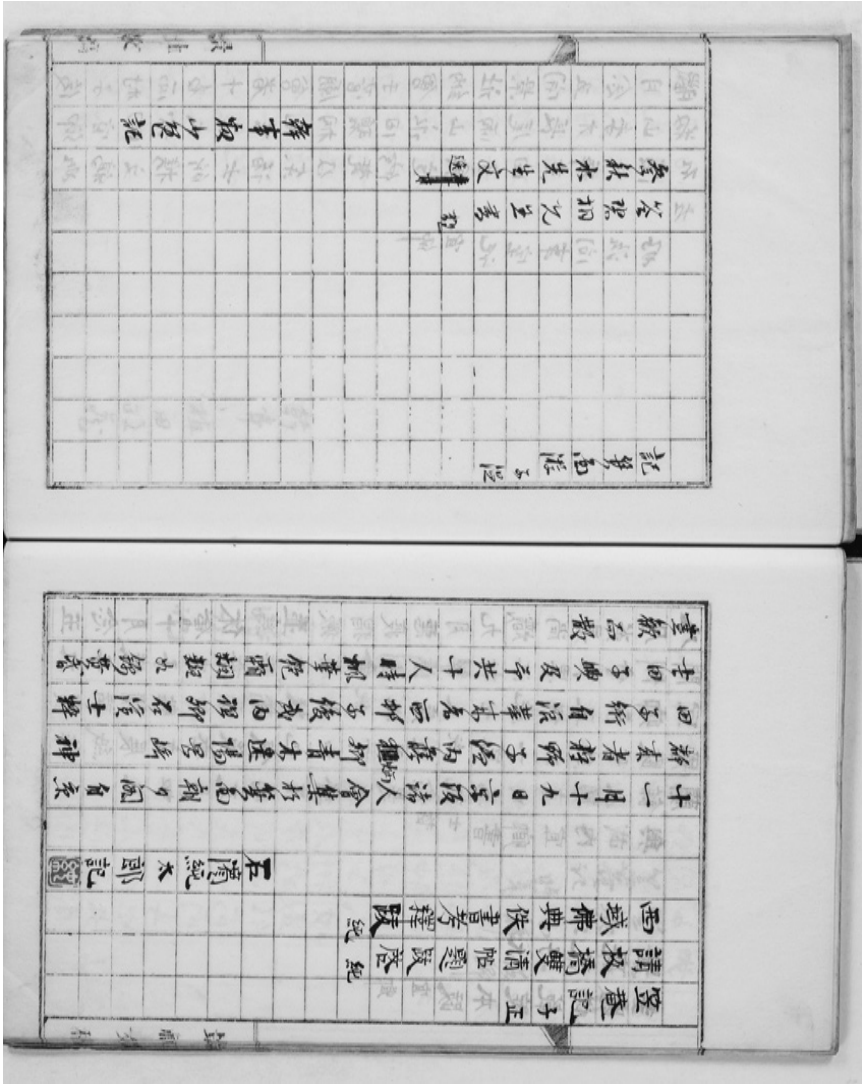
六月念五設席於東成郡深江河田子道宅會者李
才子生士亨子大老田義卿子祥併彥八人子道為
笠絡氏之裔其先世里正每供奉大嘗祭供近黃荳
去年秋行大祀於京都亦循古例子道以為菓扁齋
日笠菴欲念祖修德也卅日以彥請墨社同人作笠
菴記因為七月望送卅日雨至夜益甚酒間聞秋鴉有
脫塵因分韻詩出成而散
南宗画老跋尾序 子生
遊舟論画絶句序 李才

19葉裏〜20葉表

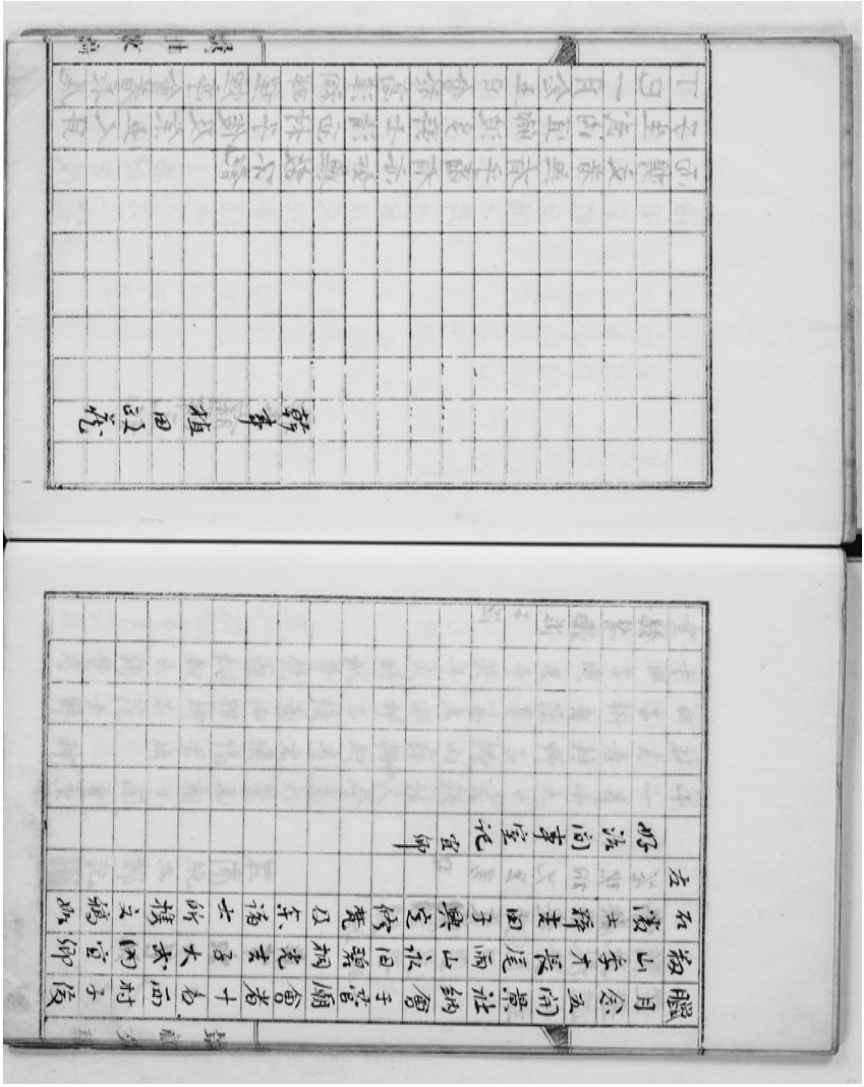




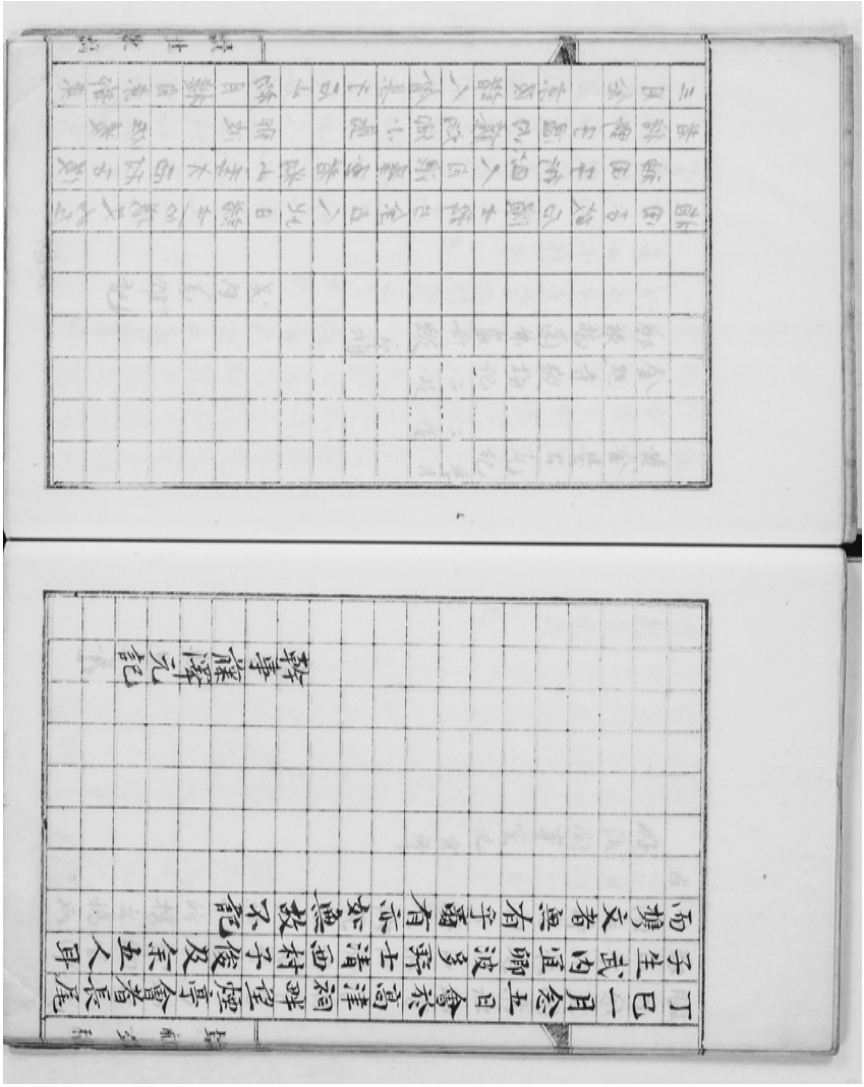
20裏～21表



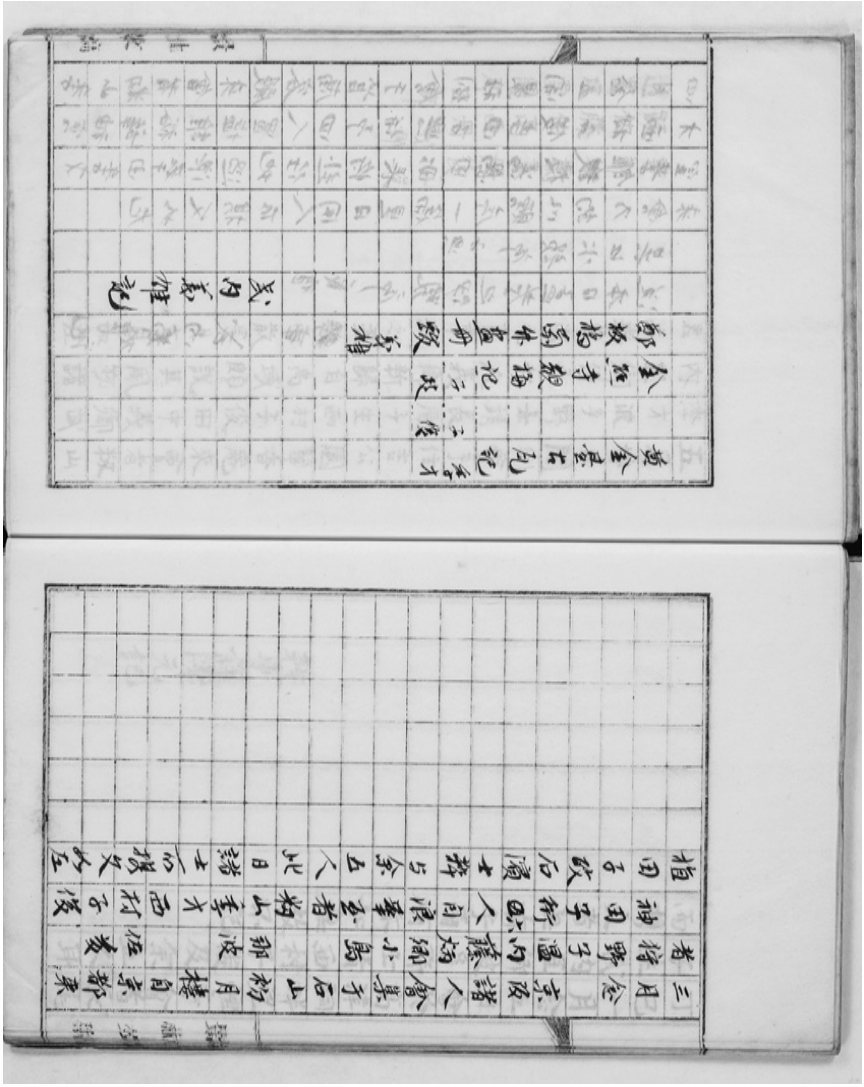
21葉ノ22葉



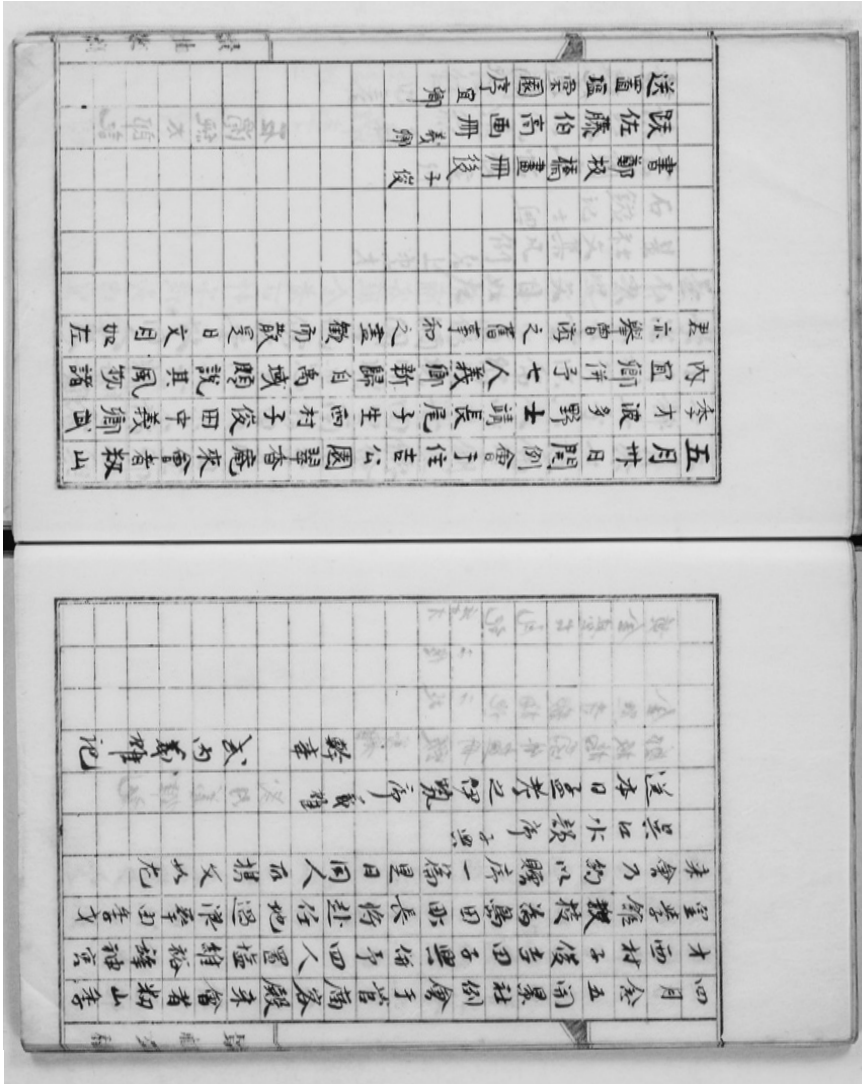
22 裏 ～ 23 裏表



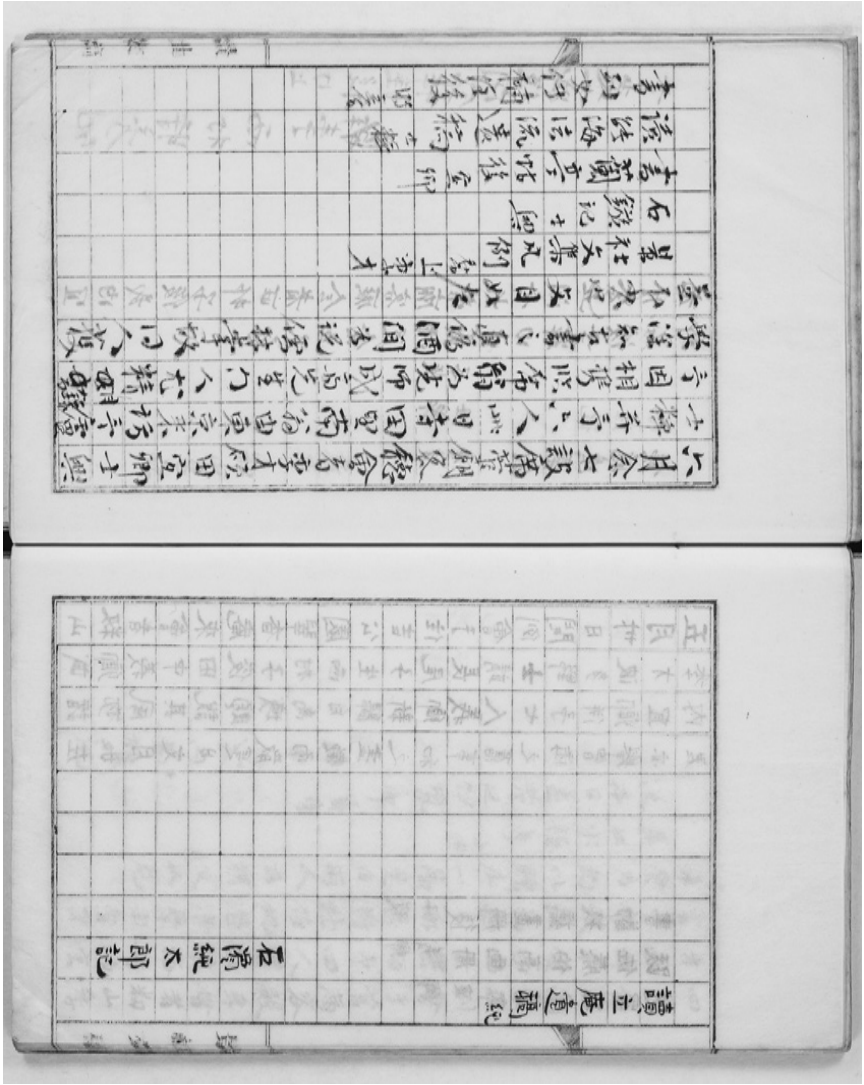
23葉裏～24葉表



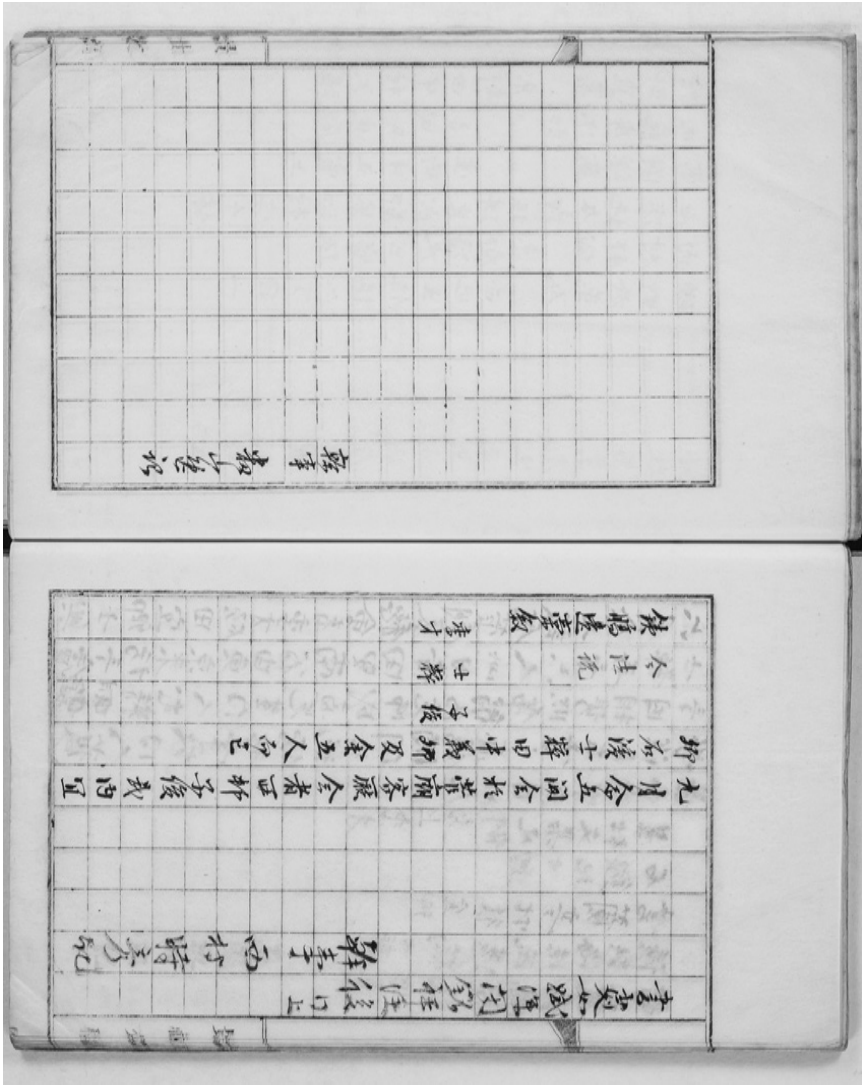
24 裏〜25 表



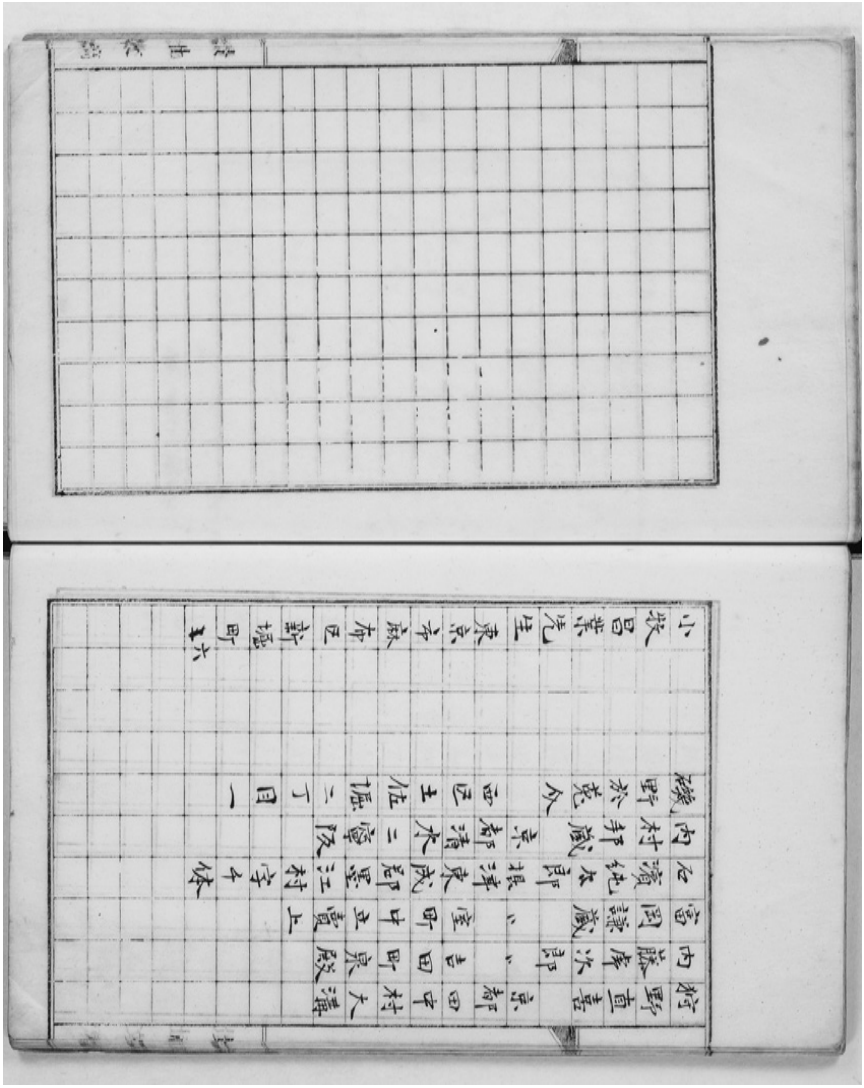
25 葉裏～26 葉表



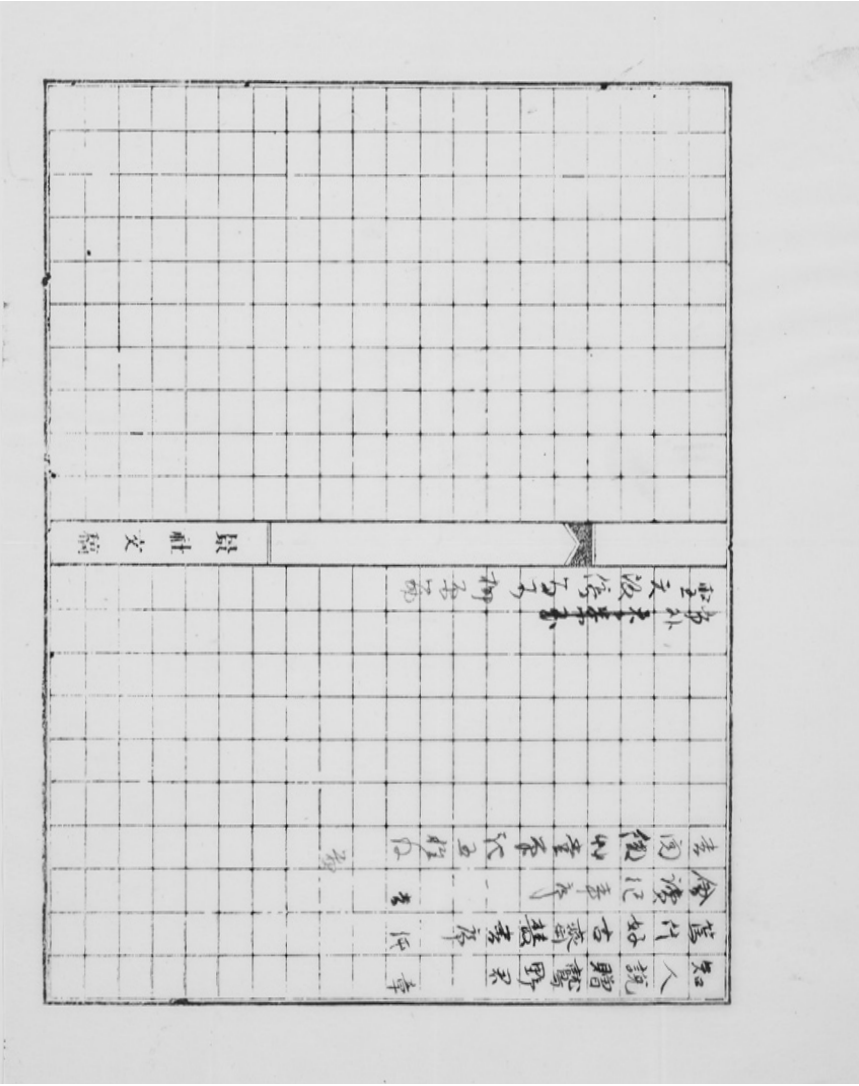
26表裏／27表裏



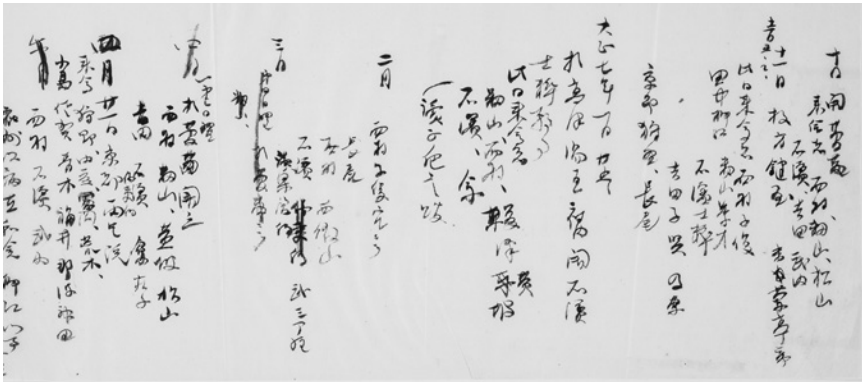
27葉ノ28葉
28葉ノ29葉は記入なし）



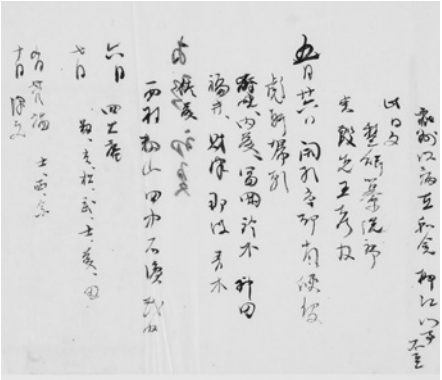
29裏～30表



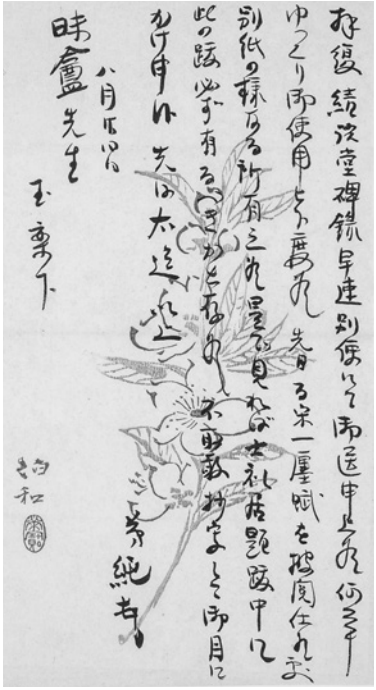
㊀ 会記録の書きかけ1枚



②巻紙に記された年次記録の草稿らしきもの（前半）



②巻紙に記された年次記録の草稿らしきもの（後半）



③昧盦先生あて石濱純太郎書簡

注

（本稿では、諸文献で「石浜」「石濱」が用いられている場合も「石濵」に統一した。）

（1）たとえば近年発見された西村天囚関係資料中の「景社題名第三」は、『景社紀事』（20葉表裏）等と対照すると、大正五年（一九一六）七月十六日の京都の麗澤社、大阪の景社の第三回連合会で作成されたものであることが判明する。この「題名」については湯浅邦弘「西村天因の知のネットワーク―種子島西村家所蔵資料を中心として―」『懐徳』八七号、二〇一九年、一七～一九頁、および同「石濵純太郎・石濵恒夫と懐徳堂」、吾妻重二編著『東西学術研究と文化交渉―石濵純太郎没後50年記念国際シンポジウム論文集』関西大学出版部、二〇一九年、二九〇～二九一頁参照。

（2）「懐徳堂記念会年表」『懐徳堂記念会百年誌』財団法人懐徳堂記念会、二〇一〇年、四四頁。

（3）『景社紀事』17葉裏。なお後述の拙稿「石濵純太郎は、いつ内藤湖南に出会ったのか？―新出資料『景社紀事』の紹介を兼ねて―」参照。

（4）『待兼山論叢・文化動態論』第五二号、二〇一八年、二一～三九頁。

（5）前掲の吾妻重二編著『東西学術研究と文化交渉』二九七～三一六頁所収。表1は同人二七名の氏名・通称・字號・出身・入社年月・年齢などを載せた。なお通番十一の武内義雄の通称欄に「元造」とあるのは表の右隣りの藤澤元の通称の誤記で、訂正したい。表2「景社会合一覧」は全二六回の開催年月日・場所・幹事・出席者などを載せたが、各回の概要記述と同人が持ち寄った作品の題名は割愛している。またその注16には『待兼山論叢』所載の拙稿の訂正を載せる。

（6）筆者は前二稿（注4、5）の段階では翻印を予定していたが、景社同人らの筆跡をも知りうる影印を公刊することが急務と考えた。本稿は、関西大学研究拠点形成支援経費（二〇二〇～二一年度、代表：玄幸子教授）の成果である。